ISSN　0915－6925

大学アーカイヴズ

全国大学史資料協議会東日本部会会報

2005. 10. 31 No.33

Eastern Japan Section, The Japanese Association of College and University Archives

2005年３月17日(木)研究会

討論会「大学史資料について考えよう」参加記

東海大学学園史資料センター　加　瀬　　大

大学史資料協議会東日本部会の第45回月例会は、2005年３月19日に東洋大学甫水（ほすい）会館を会場として開催された。東日本部会では1997年から毎年、見学会や全国研究会とは別に自前の研究会を開催してきた。2004年度の事業を計画するにあたって研究委員会では、自前の研究会についても種々の検討をおこない、「会員の興味・関心が多様になっている中で、もう一度原点に立ち返って日常の仕事をそれぞれの立場で見つめ、意見交換をすることも意義があるのではないか」との結論に達し、幹事会に今年度の３月研究会を”全員参加型の意見交換会”として実施することを提案した。この提案は幹事会でも承認され、東日本部会初めての試みが実現した。

研究会の開催にあたっては、まず司会の松崎彰氏（中央大学大学史編纂課）が学内資料と学外資料にわけて議論することを提起し、それぞれの性格や近年の議論を整理された。そのうえで、各参加者から様々な意見が出された。

学内資料については大きく４つの点が議論された。その第１は学内資料の一元管理についてである。資料担当部署（文書館・資料室・資料センターなど）で全学的な資料の情報集約ができており、各部できちんと資料が保管されていれば基本的に問題ないとの観点から、「資料担当部署が一元的に文書を管理する必要はない」との意見が出された。その上で「それぞれの資料担当部署で収集対象を特定し、必要な資料を集める方が現実的である」との議論が展開された。これに対し、各国立大学法人が情報公開法に制定に伴って整備した文書目録を見ても各大学精粗の差があり、すべての大学で文書がしっかり管理されているとは言えないという観点から、「資料情報か物理的であるかは各大学の事情によるが、資料担当部署にとって重要な役割である学内外の利用への適切な対応を実現するためにも、資料担当部署が一元的に管理する必要がある」との反論が提示された。

第２は文書規程についてである。「保存年限が切れた文書の移管に関する条項が定められても、規程だけではなかなか機能しない」という報告が多くの大学から行われた。その上で、学内の文書庫に保存されている文書が把握されていない場合が多いという現状を踏まえ、「資料担当部署としては、第一に学内に保存されている文書を把握すべきである」との意見が出された。また罰則規定制定の適否については、「罰則を定めても実効性はあまり期待できず、むしろ“肩肘をはらずに”努力を重ねていくべきである」との意見もあった。

文書規定に関連しては、学内で保存規程改正が検討された経緯について興味深い事例が報告された。「各部署の倉庫に文書があふれてしまったことがきっかけとなって、文書廃棄の基準を明確化することが議論の俎上にのぼり、文書保存規程が見直された」というのである。大学史資料の保存を考える立場からみればショッキングな事例だが、資料担当部署が規程改正の作業に積極的に関わることができれば保存に向けた意識を高めるきっかけになるかも知れないなど、考えさせられることの多い事例であった。

第３の他の部署との関係については、

「“資料とは何か”について学内の了解が出来ておらず、理解が得られても異動などで人が変わってしまえば元に戻ってしまうことが多い」ことから、「教職員に対しては絶えず説明する努力をしていく必要がある」との意見が出された。「資料担当部署は事務との信頼関係があってはじめて機能できるのであって、日々の業務を適切に積み重ねていくことが重要である」との意見や、信頼関係構築の具体的な試みとして、「文書を管理している部署と共同で倉庫内の文書を整理し、両者で目録を共有するという事業をおこなった」との事例が報告された。

さらに、文書管理システムが学内に浸透していないことが文書保存規程が機能しない理由の一つであるとの観点から、「恒常的に発生する学内資料を保全するためには、総務課など現用文書の管理を担当する部署と連携して文書の発生から押さえていく必要がある」との提言もなされた。

学外資料の収集については各大学の様々な事例が報告された。新聞資料については、「学内資料の欠損を新聞資料から補うことで、かえって地域の中で大学を位置づける事ができた」という例が報告された。また、大学に対する社会認識を把握することも重要であるという観点から、現在の新聞記事を積極的に収集している大学もあった。これらの報告をもとに、「新聞資料の収集については協議会全体で連携することが可能であり、共通のデータベースをつくることも出来のではないか」との提案も出された。

教職員や卒業生の資料については「新制大学草創期に時を知る人々からの聞き取り調査を重点的に行っている」、「卒業生の活躍を示す資料を重点的に収集している」という事例などが紹介された。また、新たに部署が作られた大学からは「建学に関わる資料を積極的に収集している」との報告があり、最重要資料の一端を改めて認識させられた。

最後に、資料収集全般にわたる議論も展開された。「学内資料と学外資料のどちらに軸を置くかは資料担当部署の性格や目的によって大きく異なるものであり、各大学の多様性を重視すべきである」という意見や、「ヨーロッパ型のアーカイブズ概念を日本に適用することは出来ないのではないか」といった意見が提示された。

また、年史編纂との関係についてもいくつかの見解が提示された。「“年史編纂のために古い資料を集めている部署”という認識から脱却するため、３年に一度大学の年報を編纂する際には典拠となる資料も提供してもらう試みを始めた」という事例が報告された。その一方で「全般的な資料収集を行うためには、周年事業の機運が高まらないと難しい」という指摘もあった。

発言する参加者

コピー技術の発達と資料の問題という側面からは、「コピーが多くなり文書１点に対する認識が軽くなったことが、資料の価値が軽く見られる様になった一因ではないか」という意見も出された。コピー資料の大量発生に対する対策としては、「保存する資料はオリジナル１枚のみとし、文書は１年ごとの簿冊にしてくれるよう依頼している」という事例も報告された。

議論を振り返ってまず感じたのは、学内資料と学外資料を個別に論じることの必要性である。今回の月例会で、学内資料は現役の教職員との関係やシステムの整備が議論の中心であったのに対して、学外資料はどの種類の資料を収集しているかという点が中心に論じられたことはその証左であろう。今後各大学の経験や知見を集約し、それぞれの資料がもつ可能性や限界、具体的な活用などについて議論を重ねていくことで、「大学史資料とは何か」という命題に関する議論が深まっていくことを期待したい。大学史資料協議会の現在のメンバーは、多くが年史編纂を過去に経験したか、現に経験しつつある方々である。大学においては今のところ年史編纂ほど大量の資料を一時期に見る機会はないように思う。資料担当部署の数も次第に増えつつある今こそが、議論を深めていく好機なのではないだろうか。

最後に、有意義な月例会に会場を提供していただいた東洋大学には深謝いたします。

2005年７月14日(木)研究会

齋藤高夫氏「拓殖大学における百年史編纂事業の経過報告」を聞いて

明治大学史資料センター　村　松　玄　太

大学史関係資料を取り扱う機関の主たる活動として、およそ次のようなものが思い浮かぶ。すなわち①資料収集・整理②調査研究③編纂④公開（各種レファレンス・展示）などである。こうした活動を行う契機が、多くの場合③にあることはよく知られている。

多くの大学にとっては編纂事業が、大学の歴史を正面から取り扱う「はじまり」を意味する仕事である。結果的に編纂事業のなかに、当該大学の大学史に対する取り組みや将来に向けてのビジョンが集中的に表現されることになる。

その意味で、編纂事業に焦点を絞った今回の齋藤高夫氏（拓殖大学創立百年史編纂室）の報告は、拓殖大学における大学史の特質がよく窺え、興味深いものであった。

報告は拓殖大学文京キャンパスにて行われた。百年史編纂室長（拓殖大学常務理事）の福田勝幸氏に挨拶を頂いた後、齋藤氏の報告がなされた。限られた期間のなかで、編纂体制を整え、資料を収集し、制作物を刊行し、大学の位置づけを図る。その経緯に触れながら、そのために、節目節目でどのような工夫をしていけば良いのか、という報告であった。

最初に編纂体制について報告がなされた。拓殖大学では大学史編纂を、事務組織の「創立百年史編纂室」と研究支援組織である「日本文化研究所近現代研究センター」が担っている。その設置に至るまでの経緯が説明された。同大学の場合も、編纂事業を契機として大学史をめぐる諸活動の条件整備がなされていったことがよく理解された。

次に齋藤氏は、拓殖大学の近代史上における位置づけをどのように考えるか、という問題について触れた。主題の置き方により、資料収集の方針や分析の視角は当然異なってくる。そこで着目されたのが、同大学とアジアとの密接な関わりである。拓殖大学はアジアをはじめとして海外に多数の関係者を送り出してきた。そのことを踏まえ「アジア社会の近代化と拓殖大学」をテーマとして編纂事業が進められたという。資料調査先も海外に求められることになり、韓国・イギリス・アメリカ・中国・台湾・ロシア等へ多数の調査を実施したことが報告された。

報告する齋藤高夫氏

調査して得た知見を刊行物にまとめていくのが次の作業である。1999年の『拓殖大学百年史研究』の創刊を皮切りに、『拓殖大学百年史　資料編』をはじめとする成果物の刊行は現在までに50冊を優に超える。短期間のうちにこれほど多くの成果物を出すことができたのは驚くべきことである。だが、その実現には学内調査を速やかに進める方策（ジョイント・タスク・フォース）の検討やアウトソーシングの積極的な採用など、地道な工夫があったことも知らされた。ほかにも映像資料の作成に関する知見など、興味深い事例が報告され、有意義な時間を過ごすことができた。

ただ、編纂を通して生まれた各種ノウハウの今後の活用計画等についても、時間が許せば聞いてみたいように思われた。

ともあれ、大学史を総体的に検討する上で、各大学の特質が如実に表れる編纂事業を見てみることは相変わらず有効な作業だと思われた。各大学の編纂事業を検証する今回のような機会は貴重だと改めて感じた次第である。

【特別寄稿】

「神戸女学院史料室」史話

元 神戸女学院史料室　若　山　晴　子

はじめに

この「全国大学史資料協議会」が、まだ東西日本の別々のグループで、それぞれ「東日本大学史連絡協議会」「西日本大学史担当者会」と称していた頃、もう10年ばかり前の1993年秋、両会の第２回合同研究会が東京で開催された時の２日目のパネルディスカッションにパネリストの一人として参加させていただきました。その時の課題は「資料館の現状」について報告せよとのことでしたから、当方の場合は「資料」ではなく「史料」で、「館」ではなく「室」であり、「大学」と限定しない「学院」の話であることをご諒承いただいた上で、若干のことをお話しいたしました。

あれから11年半を経た2005年３月末で（わたくしの退職と機を同じくして）、神戸女学院史料室は職員名簿から消えました。仕事は続いていますが、独立の部署ではなくなったようです。学院の職務機構刷新の前段階と聞きました。従ってこの「史話」は今、「回顧録」としてお読みいただかねばなりません。

史料室の起源

神戸女学院における「史料室」なる名称の初出は1970年初夏。もっともこの時、これは、５年後に到来する学院の創立百周年の当然の記念事業として「神戸女学院百年史」の刊行を考えた先生方の自発的委員会がいわば自称したものであって、学院の機構の中にこういう名称をもつ部門が組みこまれたのは1972年のことでした。この前年、理事会に「創立百周年記念事業企画委員会」なるものができ、学院百年史の刊行も検討事項としてとり上げられるに至ったためです。このように、学院の事業として公認される以前に事実上学院史編纂の目論見が芽吹いていたことには、『神戸女学院八十年史』の著者でその後の史料の散佚を懸念する和島芳男教授（日本史）の肝煎り、鈴木恒彌教授（西洋史）による学院を創立し守ってきた宣教師たちの史料文書の受入れが与って力がありました。従ってこの自称史料室のグループがまず手がけたのは、ごく近い将来の百年史編纂のために、学院における最も古くからの史料になる冊子『めぐみ』（明治23年創刊）の項目カード作りと、宣教師たちの伝道会米国本部宛ての報告書簡（英文・手書き）の解読・タイプライティング化

で、２名のアルバイトがこれに当たることになりました。これらの仕事は1971年度は大学文学部社会学科（先述の先生方が所属）の職員の兼務するところとなり、英文史料の活字化には一時ミッショナリー臨時教員の協力もありましたが、なお翌年度にもちこされて、1972年度発足の「史料室」の中心的仕事となりました。

史料室の誕生

新設の「史料室」では専任職員１名、週４日勤務の嘱託職員１名（８月以降）が、こののち、和島名誉教授と鈴木教授のほか２名の日本史担当教員と市史編纂の経験豊かな渡辺久雄教授（地誌地理学。のちの史料室長）の指導と要望を受けて、従来の仕事に加えてより多方面の史料の蒐集・整備に精を出し、まず、和島先生の監修になる『神戸女学院百年史』の通史のために働きました。『神戸女学院百年史』は編年体の通史と、学院史上特筆に価するいくつかの分野に的をしぼって論述する問題別史の二部から成り、まず前者を上梓、続いて後者を出すと決まったことによります。通史は「総説」、問題別史は「各論」と名づけられ、『総説』は時代を区切っての分担執筆、『各論』は岡本道雄学長（当時）の企画・監修によって中高大の教員と卒業生から選ばれた12名の執筆者の論考を集め、そのとりまとめから上梓までの作業を史料室が請け負うことになりましたから、以後、『各論』が陽の目を見る1981年３月までの史料室の存在理由は、つまるところ２冊の学院百年史の刊行ということになります。ここでその

後の史料室の延命に大きく寄与したと思われることは、この学院史編纂の最中から、『総説』に関わった先生方とやがて院長になる岡本先生が、折角蒐集した史料の散佚ということを以前にも増して惜しみ、何とか対策を講じなければ…という考えが濃厚になってきたことでした。

本の編集・出版に関する実務についてはとりたてて述べるほどのこともないかもしれません。もっともすでに30年も昔のことで、コンピュータどころかコピー機でさえそう一般的でなかった時代、手書き原稿の清書に、活版印刷の粋に、誇りと期待をかけた編集担当者たちの心意気をなつかしく思います。そうして、『総説』が仕上がって以来、神戸女学院史料室が美しい本作りの苦労のとりこになってしまったことを認めなければなりません。

史料室のその後

1976年10月に『神戸女学院百年史　総説』を、1981年３月に『神戸女学院百年史　各論』を刊行したのち、1年間の暫定期間（百年史編纂の後始末のつもりの）がありましたが、1982年度から史料室は、学校法人神戸女学院の院長揮下の一部署として、定年後学院顧問に就任の渡辺先生を室長に迎え、院長委嘱の委員数名による史料室運営委員会がこれに関わることになりました。もっとも、平常の史料室業務に実際に携わるのは、室長と史料室出向の大学助手（若山）と嘱託職員１名（ほんの一時期専任職員に恵まれましたが、結局束の間の夢でした）、アルバイト職員週４日分程度という状態が続きます。しかし、「今後、150年史、200年史を書く時のために…」という、院長と室長の気宇の大きさは頼もしく、史料庫こそありませんでしたが、学院内の史料たるべきものの目録作りや、先述の宣教師文書の整備（活字化に続き訳出・註記に着手）、現用文書類の蒐集整理、そして外部からの学院史に関する照会への応答、学内の研究活動への参与・協力などを享受してきました。

1983年からは年刊の84頁ほどの冊子『学院史料』を出して、史料・史実の紹介、註解、目録、索引、報告などを発表することになりました。これは、この大学史資料協議会の会員方、全国のキリスト教系諸学校、その他色々とご縁の生じた学校や研究者方にご覧いただいているものですが、わたくし担当の授業（学院史、教育史関係）の参考資料としても活用いたしました。

大学の授業に自分たちの学校のことを採り上げることにしたのは、『各論』を作り、自ら「近代日本の女子教育と神戸女学院」と題する200頁余の大論考をもってこれに加わった岡本先生の教育学者としての見識と誇りであったかと思います。けれどもこれは、岡本先生退職後中断。それを総合文化学科系の教科の中に復活させる案が出て、当面学院史に最も密着していると見えた史料室担当助手が起用されることになったものです。その後大学では入門コースの共同授業に学院のオリエンテーションのような「初期神戸女学院」という科目を作り、ここでも創立以来の宣教師たちの教育事業の紹介を分担するようにと注文が寄せられました。渡辺先生退任後は、室長の独擅場であった毎年の「創立者記念日」の礼拝講演も助手の仕事になりました。最近「自校史」が話題になっていますが、単なる学校の故事来歴の物語を超えて、日本史・世界史との関わりにおいて、学校の確固たる建学の理由とその意義について、また日本の教育史上に刻した足跡について、自ら確かめて目を見はり、また学生諸姉の関心を喚起すべく努める種に事欠かない学校論のできる学校であることはありがたいことと思います。

史料室の構成

1989年に渡辺先生の置土産ともいうべき「神戸女学院史料室規程」が出来ました。先生の室長在任８年目、退任直前に案出されたそれは、学院内のしかるべき審議を経て認可されて今日にいたりました。

これにより史料室委員会は「史料室の業務、事業の円滑な遂行を計るため」の「史料室専門委員会」と「史料室の業務、事業、人事その他、運営に関する基本的事項を審議するため」の「史料室運営委員会」の二段構えとなり、前者の委員は、チャプレン室、図書館、中高部教員、大学教員より各１名、史料室長が推薦し、史料室運営委員会が必要と認めた者、史料室員、後者の委員は前者の委員に加えること、院長、チャプレン、学長、中高部長、図書館事務長、総務部長、経理部長、ということで、委員会の開催はそれぞれ、年３回、年１回を原則としています。もっとも最近は大学の規模の拡大に伴い、大学教員が各学科から１名ずつ出る（「…必要と認めた者」の項を適用）となって、部署をまんべんなくカヴァーするという点では悪くないと思いますが、元来「学院の」機関であったはずのところが、「大学教員の」集まりの様相に傾いていることは気になるところでした。

そうしてごく最近、大学教授会の強力な意向によって、史料室長を教授会選出の図書館長の兼任とすると決められたことは大きな衝撃でした。図書館長選任の条件に「学院史」に通暁していること（あるいはせめて「学院史」に関心をもっていること）という項目はないからです。しかも現今の学識の一般的傾向は、神戸女学院の百年史の頃に見られたよ

うな先人の事蹟に思いをいたしてのいわば「温故知新」の精神を、閑却することの方が先端的であるかに見えます。実際、この大学史の協議会の中にも「建学の精神といえども時代の要求に応じて変わるべきだ」と言う方があって絶句したのはつい昨年のことでしたが、神戸女学院創立125周年に100頁ばかりの小冊子しか作れなかったこともこの種の現象の予兆であったかと気にかかっています。

史料室の仕事

今や、百年史編纂の如き大目標がすぎ去って、生きのびた史料室は何を期待され得るのかを明確に認識する必要があります。当初の意図は、将来再び学院史を書く時のために既得の史料の散佚を防ぎ、新たな史料の蒐集・保全に尽力するということでした。そして神戸女学院史料室規程はその業務を、(1)学院に関する文書的史料の収集、整理、保管　(2)学院史全般に関する情報の提供　(3)機関誌「学院史料」その他学院史に関する印刷物の刊行　(4)その他学院の歴史に対する関心を高めるための諸事業と規定しました。このうち、(1)の「文書の保管」だけに目をとめれば、たしかに史料室と図書館は大同小異。現に神戸女学院でも百年史にとりかかる以前は殆どすべてを図書館に負うてきました。一方、(2)の「情報の提供」を見て、史料室を情報センターと同列に考える人もあるようです。しかしいずれも、仕事の物理的側面にこだわる「かたそば」の議論です。集めるにせよ提供するにせよ、「史料室」で扱われるべきは「学院史」に関することであり、その扱い方は「学院史のため」を本義とする。すると、「学院史のために」有効な史料を見分け、その史料の解題に労することが不可欠となるでしょう。それの出来る人が要ります。

しかしそれにしても、なぜ「学院史」なのか。それには、創立何周年かの記念式の引出物という以上にどのような大義名分があるのか。それを「作る」以前の「学院史を書く」動機と意味、世界観を充分に普遍化できているか（つまり、それを書くだけの意義があるか）。…考え出すときりがありません。更に、具体的にどういう本を作るべきかということも…。事実を網羅する年表、年代記、資料集？もっともこれらはいかに詳細かつ厖大であろうと所詮編者の恣意的選択から免れ得ません。インターネット最盛のご時勢ともなれば（万遍なく機械に入れることが出来た暁にはの話ですが）わざわざ本にするいわれがあるでしょうか。学究の書庫や同窓生と愛書家の書棚を飾る何巻もの美麗本？しかしそれらが一気に読み通されることは、あるいはきちんと読みきられることはあるのでしょうか。それでは、何のための学院史？

本を出すだけが能ではない、という声が聞こえます。学院存立の意義、建学の精神（私学にとって学校の先立条件）の再確認を時の流れの中に跡づける作業を続け、それを節目の年にまとめるだけのことだ 、と。そうなると、史料室は学院理念の銀行のようなものということにもなりそうですが、それならばまた、この史料室の業務は、単なる文書情報の集積配送に没頭して終わるものではないという認識を新たにしなければなりません。

史料室の所在

長い歴史を持つ美しいが小さな学園の小さな史料室は未だに史料庫を持ちません。従って学院の重要文書を史料として受け入れるには不都合な状態ですが、今年３月現在の仕事場は、ヴォーリズ建築の由緒正しい校舎群の一角を占める図書館（本館）の１階にさほど大きくない４つの部屋を借り、その１室がコピー機と古いコンピュータを備えた事務・作業室、あとの３室が、本や史料・コピーのファイルや文房具、写真機材、プロジェクター、録音機材、展示用具、等々の置き場所となっていました。展示と言えば、阪神淡路大震災後に建った大学の研究棟入口のロビーの壁ぎわに、幅5.3m、奥行0.9m、高さ2.2m ほどの戸棚型の展示スペースを持つことになりましたが、設計の段階で参画できなかったせいもあり、余り使い勝手がよくありません。しかし史料室業務の(4)の実行のために活用すべく努め、12月から１月にかけてキリスト教学校らしくクリスマス関連の飾りつけをするほか、年に何回か、学院行事と学院史を結びつけたテーマを見つけて、史料、写真、本などを並べています。「学院史」に衆目を集めるためには「アーカイヴズ」といえども、かなりの興行的才覚を発揮する必要があるようです。

後　記　　－2005. 3. 31－

この原稿を書きながら、神戸女学院における「史料室」なる名称の初出の頃からこの事業に与って35年に近い歳月が過ぎたことを改めて実感しました。本稿にご登場いただいた先生方はすでに亡く、学院創立125年目にかつての気運のなかったことは、『学院史料』18号「『神戸女学院史』の歴史」に述べたとおりですが、記念の冊子『神戸女学院の125年』を作りながら、こういう学校の史料室には学院の存在理由を鼓舞するような預言者的役割も賦与されているのだろうかとしみじみ考えたことでした。神戸女学院は現在、職務機構の刷新を検討しています。その中でこの史料室はどう位置づけられるか、いずれ良い報告の聞けることを祈って、閣筆いたします。

全国大学史資料協議会
東日本部会2005年度総会議事録（抄）

日　時　2005年5月26日（木）15時～17時
会　場　東洋大学　甫水(ほすい)会館４階
401・402教室
出席校　神奈川大学　関東学院　慶應義塾
皇學館　國學院大學　国士舘
駒澤大学　上智大学　成蹊学園
成城大学　専修大学　創価大学
拓殖大学　大東文化大学　中央大学
東海大学　東京経済大学
東京電機大学　東北学院　東洋大学
日本女子大学　日本大学　武蔵学園
武蔵野美術大学　明治大学
立教女学院　立教大学
谷本 宗生（東京大学史史料室）
西山　　伸（京都大学大学文書館）
東田 全義（名誉会員）
内訳＝27大学(42名)、名誉会員１名、個人会員２名、総計45名
＊この他、14会員校・個人会員９名より欠席届が提出され、全国大学史資料協議会東日本部会規約第11条５項により委任状とみなした。
次　第　司　会　　松崎　彰氏(中央大学)
開会の挨拶　鈴木 秀幸氏(明治大学)
黙　祷
議長の選出　議　長　皆川　義孝氏
(駒澤大学)
副議長　齋藤　高夫氏
(拓殖大学)

議　題
１、2004年度事業報告･同決算報告について
２、2005年度事業計画・同予算案について
３、その他

閉会の挨拶　飯塚 勝重氏　（東洋大学校友会監事・元井上円了記念学術センター事務室長）

懇親会
議　事　＊開会に先立ち、去る５月14日心不全により逝去された後藤公平氏（専修大学総務部大学史資料課）を悼んで、出席者全員で黙祷をささげた。

１．2004年度事業報告・同決算報告について
昨年度事業報告につき、幹事会（事務局中央大学）より、配付資料「全国大学史資料協議会東日本部会2004年度事業報告書」にもとづいて事業報告があり、次いで、会計委員（國學院大學）より配付資料「2004年度収支決算書」にもとづいて収支決算が報告された後、監査委員（日本大学）より決算が適正であった旨の監査報告が行われ、各報告の通り満場一致で承認された。

２．2005年度事業計画案・同予算案について
本年度事業計画案につき、幹事会（事務局中央大学）より配付資料「全国大学史資料協議会東日本部会2005年度事業計画書（案）」にもとづいて説明があり、各事業の詳細が紹介された。続いて、会計委員（國學院大學）より配付資料「2005年度予算書（案）」にもとづいて説明があり、原案通り満場一致で承認された。

３．その他
幹事会および出席会員からの議案提起はなかった。

懇親会　総会終了後、懇親会を開催した。鈴木秀幸氏（会長校明治大学）による開会の挨拶と飯塚勝重氏（会場校東洋大学）の乾杯の音頭により開会した懇親会では、会員間の交流や情報交換が活発に行なわれた他、恒例となった各校新任者の紹介や挨拶等もあり、終始なごやかな雰囲気のうちに親睦を深め、閉会を迎えた。閉会の挨拶は東田全義氏（名誉会員）であった。なお、司会進行役は松崎彰氏（中央大学）が務めた。
（出席者42名）

全国大学史資料協議会
東日本部会幹事会議事録(抄)

第62回　2005年3月17日(木) 13：30〜14：30
会　場　東洋大学　甫水(ほすい)会館
　　４階401号室
出　席　神奈川大学　慶應義塾　國學院大學
　　中央大学　東海大学　東京経済大学
　　武蔵野美術大学　明治大学
　　谷本宗生　豊田徳子　西山　伸
議　題　(1)報告事項　各委員会より
＊編集委員会
神奈川大学齊藤委員長より「大学アーカイヴズ」33号について、依頼原稿を掲載したい旨の編集案が提起され、了承された。
また、東海大学加瀬委員より、『研究叢書』第６号の編集を進めているとの報告があった。
＊研究委員会
東京経済大学中村委員長より、本日開催の第45回研究会において、開催趣旨の説明を行う旨の報告があった。
＊特別委員会
京都大学西山委員長より、『日本の大学アーカイヴズ』の編集状況について報告があった。
(2)2005年度東日本部会総会について
＊事務局中央大学より、総会用資料の原案が提出され、次回幹事会にて審議･決定することを申し合わせた。
(3)2005年度全国研究会の実行委員会について
＊会長明治大学より、実行委員会編成案が提起され、了承された。具体的な活動内容については、次回幹事会にて審議することとした。
(4)協議会新パンフレット作成について
＊武蔵野美術大学より新パンフレットの改良デザイン案が配付され、検討の結果、了承された。今後は、西日本部会の調整の上、印刷することを申し合わせた。以後作業は武蔵野美術大学に一任することとした。
(5)その他
＊大乗淑徳学園の協議会退会を、本年３月31日付で承認した。
＊成城大学の協議会入会を、本年４月１日付で承認した。
＊立教女学院の協議会入会を、本年４月１日付で承認した。
＊事務局中央大学より、『研究叢書』第５号の東日本分が届いたとの報告があり、配布方につき検討した。

第63回　2005年４月６日(水)14：00〜16：30
会　場　駒澤大学禅文化歴史博物館
　　博物館実習室
出　席　神奈川大学　慶應義塾　國學院大學
　　駒澤大学　中央大学　東海大学
　　東京経済大学　武蔵野美術大学
　　明治大学　谷本宗生　豊田徳子
　　西山　伸
議　題　(1) 2005年度事業計画について
＊2005年度全国大会の運営について審議し、事務局(中央大学・武蔵野美術大学)、研究委員(東京経済大学)、編集委員(東海大学)、会計校(國學院大學)、会場校(慶應義塾)からなる実行委員会を発足させて、準備作業を開始した。
＊2005年度全国研究会について審議し、「大学史資料の公開・活用」を統一テーマとして、次回幹事会にて具体的内容を検討することとした。
＊上記統一テーマを部会研究会のテーマと連動させ、部会研究会の活動を充実させることを申し合わせた。
＊また、各委員の事務負担を増大させないよう、実行委員会・研究委員会は幹事会とあわせて開催することとした。
(2)2005年度部会総会の運営について
＊2005年度部会総会を、来る５月26

日(木)東洋大学を会場として開催することとし、会場確保等を同大学に依頼した。

＊東日本部会2004度事業報告書について審議し、編集委員(神奈川大学)より会報『大学アーカイヴズ』第32号刊行の報告を受け、武蔵野美術大学より、新パンフレット刊行の報告を受けた後、両印刷物の配布方について検討した結果、『研究叢書』第５号と共に部会総会にて配布することを決定した。

＊続いて、東日本部会2005年度事業計画案の審議に移り、特別委員会(西山)より『日本の大学アーカイヴズ』10月刊行の提案があり、了承された。なお、出版社との交渉は同委員会に一任した。

＊また、『研究叢書』について審議し、全国大会主催と叢書編集の担当部会を一致させるため、第6号に続いて第7号も東日本編集担当とすることを、西日本部会に提案することとした。

＊最後に、インターネットを利用したメール・マガジンやホームページの作成を将来計画として掲げ、西日本部会と協力して実現を目指すこととした。

＊会計委員(國學院大學)より、決算報告と予決算書様式修正の提案があり、審議の決算と提案を了承し、修正方を会計委員(國學院大學)に一任した。

(3) その他

＊慶應義塾より、市古健次事務長着任のご挨拶があった。

第64回　2005年５月26日(木)13：00〜15：00
会　場　東洋大学　甫水(ほすい)会館
　　４階401号室
出　席　神奈川大学　慶應義塾　國學院大學
　　駒澤大学　中央大学　東海大学
　　東京経済大学　日本大学
　　武蔵野美術大学　明治大学
　　谷本宗生　豊田徳子　西山 伸
議　題　(1)2005年度東日本部会総会の運営について

＊事務局中央大学より、部会総会の出欠状況について説明があり、総会開催に必要な定足数を満たせたため、総会は成立したとの報告があった。

＊会計校國學院大學より、会計監査を監査校にお願いした結果、「適正」の認定を受けたとの報告があった。

＊部会総会の進行と各幹事の役割を確認した後、部会総会会場の設営をおこなった。

(2)2005年度東日本部会研究会について

＊今年度の研究会は、全国研究会と連動させて活動を充実させる方針を、前回の幹事会にて申し合わせたため、以下の第３議題とあわせて検討することとした。

(3)2005年度全国研究会の運営について

＊2005年度全国研究会の統一テーマである「大学史資料の公開・活用」について、具体的内容を検討したが、時間的な制約により各幹事の意見を統一することが出来なかったため、早急に実行委員会を開催して、そこでの検討に一任することを申し合わせた。

＊また、上記実行委員会の開催と同時に幹事会を開催し、部会研究会の運営を検討することとした。

(4) その他

＊研究委員会中村青志委員長より、企業史料協議会から「中国档案学会訪日団受け入れについて」の協力依頼メールが届いたとの報告があり、次回幹事会にて検討することとした。

第65回　2005年６月８日(水)12時30分〜17時
会　場　明治大学　駿河台校舎研究棟４Ｆ

第二会議室

出　席　神奈川大学　慶應義塾　國學院大學
駒澤大学　中央大学　東海大学
東京経済大学　武蔵野美術大学
明治大学　豊田徳子

議　事　(1)2005年度全国大会の運営について
＜全国大会実行委員会＞

＊本年10月５日(水)～７日(金)開催予定の全国大会日程について審議し、５日(水)に全国役員会・全国総会・記念講演（福澤研究センター関係）を開催することとした。

＊６日(木)は全国研究会を開催し、統一テーマ「大学史資料の公開・活用」の下に、公開・活用の事例として「レファレンス・年史編纂・展示」の３小テーマを設定し、従来の分科会方式ではなく、小テーマごとに報告と全体討論を行い、最後に総括討論を行う進行案を決定した。

＊７日(金)は見学会を開催し、正午頃に解散することとした。

＊上記の日程案を西日本部会に連絡し、報告者・司会他の担当を選出するとともに、同部会の意向・希望などをうかがい、次回幹事会にて最終案をまとめることとした。

＊参加費については、部会総会の際と同様に、参加日数等による減額は行わず、基本的に一括徴収することを申し合わせた。

(2)2005年度部会研究会について

＊全国大会のテーマに連携させた部会研究会の運営について審議し、次回の研究会は、「レファレンス・年史編纂・展示」の各小テーマに関係する内容の研究会を開催することとした。

(3)その他

＊編集委員校東海大学より、『研究叢書』第６号の編集状況が報告され、パネルディスカッションの討論部分の校正について、検討の要請があった。審議の結果、まずは東西両部会幹事会にて内容を検討することとした。

＊編集委員校神奈川大学より、会報『大学アーカイヴズ』の編集状況が報告された。

＊会員外へ依頼原稿料について検討し、400字原稿用紙１枚1,000円、支払い上限15,000円とすることを決定した。なお、講演と原稿をあわせて依頼する場合は、従来の内規通り30,000円・50,000円の２種とした。

＊事務局中央大学より、部会総会の定足数に付いて検討の要請が出され、今秋以降、部会規約の見直しをおこなうこととした。

＊企業史料協議会から協力依頼のあった「中国档案学会訪日団」の件については、訪日の日程や活動内容が未定のため、可能な範囲内で協力することを申し合わせて、継続審議とした。

お詫びと訂正

本誌会報 No.32の11頁右列「懇親交流会」の項で、高橋正氏の所属と植田弘氏のお名前に誤りがございました。

誤		正
高橋正氏（関西大学）	→	（関西学院）
植田浩氏	→	植田弘氏

関係者の皆さまにはご迷惑をおかけしましたことをお詫びし、訂正いたします。

会　報　編　集

編集委員会

【神奈川大学大学資料編纂室・齊藤研也】
〒221-8686　横浜市神奈川区六角橋3-27-1
☎　045-481-5661

【東海大学学園史資料センター・馬場弘臣・加瀬大】
〒259-1292　平塚市北金目1117
☎　0463-58-1211